

若手法務交流会へ参加しての感想 ——若手法務部員へ

イオン株式会社
法務部

村井俊雄 (Toshio Murai)

本稿では、10月8日に開催された、若手法務交流会〈2024年度 東京開催〉初回にオブザーバーとして参加させていただき、参加者から聞いた声、私が感じた印象、考えについて書かせていただきます。

1 私と経営法友会との関わり

現在、私は経営法友会の5つの部会（総務部会、月例部会、研究部会、研修部会、大阪部会）のうち研究部会において運営委員として活動しています。私自身、入社後50歳を過ぎるまで企業法務という仕事とまったく関わりがなく、法務初心者であったため、経営法友会の皆さまには月例会、研修会、懇談会とさまざまな機会を通じて勉強させていただき本当に感謝をしています。

2 研究部会について

私が参加する研究部会の活動内容を紹介しますと、大きく二つの活動に取り組んでいます。

一つは研究会活動で、部会内で実務上の課題を整理し、必要なテーマを選定のうえ、会員各社からメンバーを募ります。研究会設置後は、研究会内でテーマ検討を重ね、その成果を会員の皆さまに還元しています。

もう一つは、政策、立法等への提言や意見照会（パブリックコメント）に対する意思表明を行う、政策、立法等の意見照会活動です。

3 若手法務交流会

研究部会では定期的に議論を重ね毎年さまざまな研究会が立ち上がるわけですが、若手法務交流会は其中でも少し毛色の変った企画だと思います。そもそも、この会合の開催目的は、同世代の担当者間で意見交換をしてもらい、それだけでなく他社先輩社員をゲストに迎えて経験談をうかがい、企業法務で働く者同士が悩みを共有し、実務の情報交換を行うことで、人脈の幅

を広げ、企業人として活動する上で、今後の自身のスキルアップのヒントにしてもらおうというものです。昨年度も東京で開催しましたが、今年度は東京（全3回）と大阪（全2回）の2拠点で開催されました。2024年度の東京開催は、以下の条件、

- ・35歳以下
- ・法務部門経験2年目から5年目まで
- ・すべての会合に出席できる方

で募集されたのですが、事務局から伺ったところ、定員20名の枠にサイトオープンと同時に申込みが殺到し、瞬時に定員に達したという人気企画となっています。

4 若手法務部員の抱える悩み

今回も参加者は社歴、年齢、入社区分（新卒・中途）、所属する組織の規模・人数等条件はさまざまで、法務を専門で担当されている方から知的財産、コンプライアンス、総務、経営企画部門等の中で法務の仕事・役割を担われている方まで担当業務も多岐にわたっていました。その場で話された内容は、営業部門・事業部門との関わり方、ナレッジ管理、ジョブローテーション、資格、セミナーについてなどといった自らの現在の業務が中心でしたが、各社、共通点も多くみられました。

皆さんが共通して抱えていたのはやはり、営業（本業）部門とのコミュニケーションの悩みでした。「事業部から契約書を丸投げされる。

せめて中身を読んでからにしてほしい」といった法務目線の悩みから、「法務って、なんか怖いよね」「法務に相談するとしかられるんじゃないかな」といった現場から敬遠されていることへの悩みがあり、企業法務と本業（現場）との隔たりの存在についてあらためて認識しました。

私自身が日々の業務で悪戦苦闘しているリーガルテックの導入など、業務の効率化について、若手も同じような悩みを持たれており、さまざまな AI ツールの導入が進む中、他社の取組みを知りたい、自らの立ち位置についてどう考えるべきか悩ましいといった声も聞かれました。

自らの知識の習得方法、今後のキャリア形成、部門内・外でのコミュニケーションに関しても悩んでおられるようで、「自社内に若手の法務部員がいない」、「常日頃情報交換できる相手がいない」といった声も聞かれました。

5 「就社?」「就職?」

——「企業」で「法務の仕事」をするとは？

企業法務部門は近年専門部門として重要な役割を果たしており、社内における法務部門のステータスも向上していると考えます。企業法務が重要性を増す中、法務担当として企業に入社したのが彼ら、彼女らであることを考えると企業法務について熱く議論する姿は頼もしく思えます。

一方で参加者の中には、知識・経験を持ち合わせないままいきなり他部署から法務部門に異動してきた方もおられ、企業法務の仕事範囲は、スキルアップはどうすればよい、キャリア形成は、とそれぞれがさまざまな悩みを持たれている様子がうかがえました。長い社会人生活を企業法務のプロとして生きるか（私は法務部門への「就職」と考えています）、入社した会社で法務の仕事にとらわれずに何かを成し遂げるのか（「就社」）。正解はありませんが、50歳を過ぎて法務の仕事に飛び込んだ私は、結果的には後者の生き方を選んできました。私からの問いかけに対して、参加された方々が自分はどう

の道を選ぶべきか真剣に議論されている姿を拝見して、法務の将来に向け心強さを感じました。

6 結語 若手法務部員へのメッセージ

研究部会内の議論で、20代を中心とした Z 世代はリスク回避を重要視することが特徴であり、同じ職場で働く先輩・上司にとっては考えていることがつかみにくいと感じているとの意見もありました。ならば、「よその会社の先輩に対してであれば相談（愚痴）もいえるんじゃない?」というアイデアを踏まえて生まれた本企画ですが、我々の想像以上にさまざまな本音を聞くことが出来ました。そして、環境は変化していますが、私が過去に悩んできたことに今の若手も同じように悩んでいるということが、今回お話をうかがいよく分かりました。

皆さんが交流会に参加して、議論を見守る、先輩法務部員のあたたかな視線を感じたのではないのでしょうか。でも、本当は、皆さんのとなりにいて、一緒に働いている上司・先輩社員こそがあなたの悩みや価値観について常に気にかけているのだということを、心の片隅に留めておいてほしいと思っています。

「これでも結構気にしているのですよ……」